

特集

内子町における グリーンツーリズムの取り組み

黒澤賢治 (内子町総務課 町並・地域振興班)

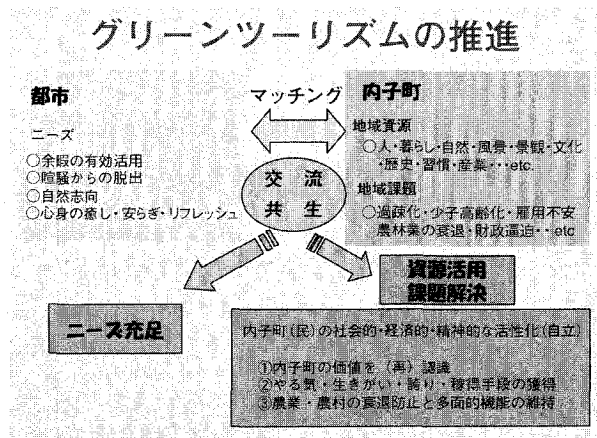
(1) 内子町のグリーンツーリズム

日本におけるグリーンツーリズム導入の背景には、労働時間の短縮による余暇時間の増大と生活の質向上へのニーズの高まり、また、平成4年に農林水産省内に設置されたグリーンツーリズム研究会において、農村空間を「ゆとりとやすらぎのある人間性豊かな生活を享受し得る国民共通の財産」であるとして「都市と農村の新たな共生関係を実現」するために、グリーンツーリズムがその役割を担うべきであると提言したことなどがあります。

内子町ではグリーンツーリズムを「町内の地域資源や文化を見直し、内子らしい町並み、村並み、山並みの景観や暮らし、文化の保存形成を図りながら、美しい地域を作っていくための保存運動であり、それらを舞台に質の高い交流人口を拡大していくこと」つまり「都市住民とのパートナーシップによる地域づくり」だと捉えています。そのために行政と住民が協力して基盤整備を進めてきました。行政としては、ハード面では「石畳の宿」「いかだや」などに代表される交流・宿泊施設、また「内子フレッシュパークからり」など農産物直売施設の整備、ソフト面では美しい地域づくりのためのルールとして「環境基本条例」や「景観まちづくり条例」、また、「美しい景観建造物デザイン賞表彰実施要綱」の制定などを行ってきました。

(2) グリーンツーリズムの推進

次に、内子町でのグリーンツーリズムの推進方法については、都市住民の「農村地域へのニーズ」と、内子町が持つ「地域資源」や「地域課題」を「交流」の中でうまくマッチングさせていく方法により推進しています。例えば、「余暇を有効に活用したい」とか「都会の係喧騒から抜け出したい」「自然にどっぷり身を置きたい」そして「心身ともに癒され、安らぎ、リフレッシュし



たい」という都市住民のニーズに対して、内子町にある「果物などの農産物」や「郷土料理」「棚田」「手仕事」といった「人・暮らし・自然・風景・景観・文化・歴史・習慣・産業」などに関する内子固有の資源を媒介に交流することによって、都市住民のニーズを満たし、内子町の資源を活用していくと同時に「過疎化・少子高齢化・雇用不安・農林業の衰退」と言った課題の解決をも図ろうというものです。

そして、最終的には、内子町民の社会的・経済的・精神的な活性化（自立）、つまり地域づくりへとつなげていくものです。具体的には、内子町の価値を認識・再認識すること。また、町民がやる気や生きがい、誇り、稼得手段を獲得すること。そして、農村・農業の衰退防止とその多面的な機能を維持していくことなどです。

(3) グリーンツーリズム活動の経過

「地域資源を活かした都市住民とのパートナーシップによる地域づくり」をグリーンツーリズム活動とするならば、内子町におけるグリーンツーリズム活動の原点は、昭和57年の観光農園（ぶどう園）のオープンにあります。元来内子町は、温暖な気候と肥沃な土壌に恵まれ、早くから果樹栽培が盛んで、栗・柿・ぶどう・梨・桃・リンゴなどが栽培されていました。そうした果樹農家の新たな農園経営の方法として、農園を単なる果樹生産の場としてだけでなく、果樹という独自の資源を媒介とした、都市住民と内子町民の交流活動の場と捉え、農園内での収穫体験や旬の味覚を味わう体験の効果は、農家の所得向上だけにとどまらず、都市住民との深い絆を生み、以降の都市と内子の交流を大きく牽引することになりました。

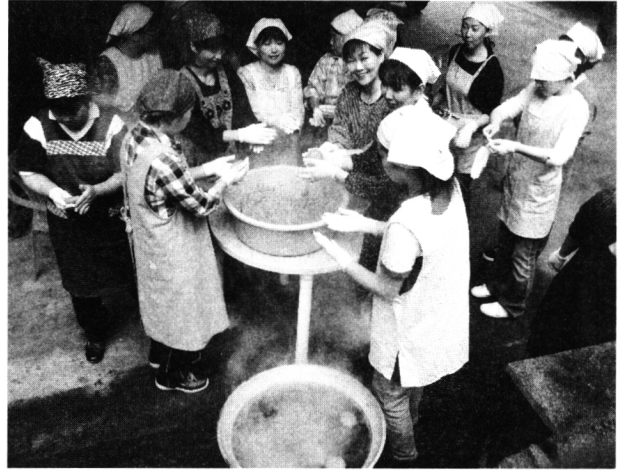
また、昭和60年に開講した「内子町知的農村塾」は、住民の「第一次産業の発展なくしては町の発展はない」との強い思いから、農業の振興を図り、中山間地である内子町の農業の在り方を、農家と行政が共に学ぼうと始まったものです。内容は、兼業農家が多いこの地域での農業経営の在り方や、高齢者・女性の役割、また、時代のニーズに合わせた生産販売方法など、最新の農業経営の知識を学習するものです。この塾に学んだ人たちが、その後「内子フレッシュパークからり」や「うちこグリーンツーリズム協会」などの立上げに係わり、内子町におけるグリーンツーリズム活動の中核の担い手として活躍しています。

(4) グリーンツーリズムの取り組み

①うちこグリーンツーリズム協会

内子町のグリーンツーリズムの振興で、その中心的な役割を果たしている組織の1つが、平成16年に発足した「うちこグリーンツーリズム協会」です。現在18会員で組織され、農家民宿など宿泊施設が5、農業体験など体験施設が5、宿泊・体験の両方を提供しているのが8会員です。

各施設では、それぞれの特徴を活かした農業体験など農家の仕事や生活・食事、また地域の景観や自然を楽しめる体験メニューや宿泊を提供しているほか、協会としては、情報発信力の強化や学習活動などに力を入れ、内子独自のおもてなしが都市住民から支持され、年々交流人口が増加しています。また、新たなおもてなしのツールづくりとして、特区を活用した「どぶろく」の製造販売を開始したほか、内子特産の果実を使った「果実酒」の製造販売に向けた研修などを始めており、滞在型ツーリズムの推進役として大きな期待が寄せられています。



こんにゃくづくり体験

②泉谷地区棚田を守る会

平成11年に、農林水産省から日本の棚田百選に認定された泉谷地区では、地域の自然に親しむ「自然浴ツアー」を実施しています。棚田はもちろん、幕末の志士坂本龍馬脱藩の道や内子町で一番大きな滝である紅葉ヶ滝など、地域の自然に浸り、歴史を学び、暮らしを感じてもらう中で、多くの泉谷ファンが誕生しています。

また、過疎化、高齢化が進む棚田での作業の省力化によって、耕作放棄地化を防ぐとともに、良好な景観



自然浴ツアー

の保全を図るため、天然コットンの布の中に種籾を仕込み、田圃一面に布を敷き詰めるだけで田植えが終了し、しかも無農薬で栽培ができる「布マルチ栽培」を、棚田としては全国で初めて導入しています。また、平成16年からはオーナー制度を開始し、各地から家族連れや若者のグループなどが訪れ、棚田での農作業を通じた交流活動が行われています。

これらの活動により、棚田の持つ多面的な機能の理解が進み、石楠花や彼岸花の植栽など景観保全活動にも進展しています。こうした棚田を守る会の熱い思いと熱心な取り組みに、自治会や会の趣旨に賛同する町民、また町職員などが応援団として自主的に加わり、地域あげての

活動に発展しています。

③うちこ手仕事の会

内子手しごとの会は、内子の自然や暮らし・産業・文化・歴史など地域の資源を利用して生まれた手しごとと、それを育み伝える人たち、また、その作品を融合し、希少な生活品を作成して全国に紹介していこうと、平成19年11月に30名で結成された組織です。業種は、木工・陶芸・桐下駄・苔玉・牛革製品・ガラス工芸・鍛鉄・和蠟燭・和傘・トールペイント・洋服・染色など様々です。



手仕事展

以前はそれぞれの分野で体験の提供や交流活動を行なっていましたが、コラボレーションにより、作品の種類やそのデザイン・機能・用途などのバリエーションが増え、生活の随所に、内子独自の手しごとの温かみと完成度の高さを提案していくことができるのではと活動しており、平成20年10月には、その成果を発表する展示会を行い、約1500名の人たちに、内子が生んだ手仕事を堪能していただき、新たな内子ブランドの創造への期待も高まっています。

④ODA（おだ）の木協会

内子町には、小田深山という4500haにも及ぶ大自然があり、ODAの木協会では、この資源を国際交流やみどり豊かな自然環境の中での環境教育スクール事業の中で活かし、グローバルな視点に立った教育・文化・経済の発展を促進しています。



自然体験キャンプ

特に、ODAの木自然学校として開催している、2日から9日間に及ぶ自然体験キャンプでは、山や溪谷での活動を通して、自然の豊かさや優しさ、また厳しさや怖さなどを学ぶことによって、環境を保全していくことの大切さや、それが自分たちの生活を守ることに繋が

ることなどを学習しています。

内子町では、小田深山の自然をいかに保全し、都市住民との交流の中に活かし、地域づくりにつなげていくかを、ODAの木協会をはじめとする深山を思い活動する方たちと共に「小田深山保全活用計画書」という形でまとめています。

⑤子ども農山漁村交流プロジェクト

内子町では、今までのグリーンツーリズム活動で培ったノウハウと豊かな地域資源を活かして、積極的に交流活動を展開していこうと、平成20年度より始まった、子ども農山漁村交流プロジェクト受入モデル地区に名乗りを上げ、全国50カ所のモデル地区の選定を受けました。受け入れに関しては、うちこグリーンツーリズム協会を始めとして、グリーンツーリズム活動や交流活動などに実績がある12団体で「内子わくわく体験協議会」という受け入れ組織を立上げ、連携協力しながら、将来の日本の担う子どもたちに、



先人から伝わる生活の智恵や自然との共生など、内子ならではの体験をすることによって、今後の生活に、この経験が活かされるような、そんな体験を提供したいと思い取り組んでいます。

(5) グリーンツーリズムの課題と今後の方向性

内子独自の資源を活用して交流活動を実践し、地域づくりにつなげている組織やグループは、町内にたくさんありますが、地域によって温度差があるのが実態です。こういった活動を町内全域の村並み・山並みに広げていくための連携や波及活動が今後必要だと考えています。

次に「滞在型ツーリズムへの移行」ということも重要なテーマで、多くの方に来ていただいて交流活動を行っても、農家民宿などで宿泊していただいても、全体的には、まだまだ通過型ツーリズムが大半です。滞在型を目指し、地域資源の掘り起こしや、それらをブラッシュアップブランド化する方法、また、交流の中に活かしていく仕組み作りが求められます。

また、人口減少に歯止めがかからず、農地や山林の荒廃が進む現実を受け止め、今までのグリーンツーリズム活動がもたらした効果を検証しつつ、地域資源を活かした都市住民とのパートナーシップによる地域づくりが、内子町が抱える課題の解決に結び付くような推進方法についても考えていかなければならないと思います。